

幼稚園參觀記

左の一篇は「心理研究」第五十七號に老教頭なる匿名の下に某氏の發表せられた「試験調べ」といふ記事から抜萃したものであります。老教頭氏は一日その高等専門教育を受けつゝある生徒を連れてお茶の水幼稚園を參觀せられ、生徒にその參觀記を作らしめられました、その「參觀記」は試験の答案として檢閲せられ、老教頭氏はこれを「試験調べ」の中に發表せられたのであります。高等教育を受けつゝある婦人が幼稚園なるものを如何に觀察したのでありませうか。皆さんはこれによつて十分なる興味を感ぜらるゝであらうことを信じて少し長くはなりますが抜萃轉載することに致しました。

第一部

朝の涼風が水のやうに藤棚にみちてしんとした

廣い園内に白いエブロンをかけた小さい人影が點々と湧き出して居るのを見た時に自分はエビメシウスやボンドラの世界に來たやうな心地がした。眞似ほどの機械體操やブランコのぐるりには男の兒が騒いで居る、じめ／＼した土手の花壇には女の兒が靜かに花を集めて居る、こゝにすでに性の向ふ相違が表はれて居る。小さい影は見る／＼中にふえて、をどる飛びつく、うたふ、さわぐ。これが八時半に時間の鐘が打つとピタリと自分等をはなれて、ひよつ子が餌に走るやうに小さい入口さして見る見る吸ひ込まれてしまふ。

自分等は今日此の小供等を材料として幼稚園を勉強するのである。一行は三組に分かれて、自分の組は二の組を見るべきであつた。導かれて這入るとかなり廣い教室の正面の黒板の上には勢よく

竹の畫が描れてある。片すみには生徒の成績品をならべたガラス戸棚があつてその前にオルガンが
おいてある。相つやく片すみには臺上の大きな花
瓶に芍薬の華やかな花が今を盛りと咲いて居る。

部屋の後ろには一間ほどの高さの戸棚が壁にそう
て造られてあつて、教室に這入つて来る生徒は各
自の提帶品を一々その中に秩序よくしまつて行く
教室の兩側に生徒の机は二列に長くならべられて
あつて男の兒も女の兒も何等の區別なく入り雜じ
つて可愛らしい腰かけの上であばれて居る。

折から小供等は爪掃除、エプロンの取り替へを
やつてもらつて居る。小供等は正面に腰かけて居
る若い先生のぐるりを取りまいて小さい手を擴げ
て検査をして頂く。許しを得た小供等は、之れ見
るとばかりに自分等の方をにらんでかへつて来る
が、いけなかつた兒は花臺の引出しからはさみを
出して耻かしげに指をひねくつて居る。やがてエ
プロンを持つて先生の前に来るもの友達同志でか

け合ひをやるもの、一しきりの騒がすむと、いざ
と一同つれ立つて共同室へ先生に御早うにと出か
ける。此の集りをこゝでは會集とよんで居る。百
餘名の幼兒が三列に半圓をゑがいて「先生お早う
ご機嫌奈何、皆様お早う御機嫌奈何」とピアノの
曲に合はせてあどけなくうたふ。これがすむと二
三の表情唱歌を自分等の爲めにとくにうたはせ
て、再び各自の教室にもどる。

一つの業にとりかゝる時間の始まりに保母がオ
ルガンの眠る様な曲をひくと小供等は一同しんと
なる。「小供等のことですからいづれ静かにして居
る事はありますがせめて二分でも三分でも静か
にして小供の精神を落ち付けさせたいと云ふ希望
でやつて居ります」と保母が云はれた。やがて保
母が「皆さん今日は切り紙をいたしましたようね」と
云はれると、當番にさゝれた子が四人ばかり程立
つて机の引出しから人數丈けのはさみに鉛筆、色鉛
筆、型紙と畫學紙をとり出して来ていち／＼にく

ばつて歩く。小供等のやる事は魚やら家や、たるまなどの形を切り抜いて簡単な彩色をほどこした型紙をてんでに選んで畫學紙の上に於いて鉛筆でその形をうつしてそれを切り抜いてお手本のやうな色を付けるのである。「未だ斬らしい試みで成功するかせぬか分かりませぬが此の前の成績はあれに」と指される壁の上に、四ツほどの優秀なのがはりつけられてある。小供等は此の型紙をてんでにえらんで白紙の上に於て幼い手元で形を取り始める。見まはして居ると紙を受けとつてはじから使つて行く者、真中からたつた一つを抜くものがある。早くつて大ざつぱなもの、おそくても正確なもの、やり出すや否や「むづかしいや〜」とだゞをこねて机の間をとびまはつて居る兒があるかと思へば人が書き終へて遊びに出てしまつても一人残つて黙々として他をつけて居る兒もある。落ち付いて黙つて居るのもあれば、そは〜と此方ばかり向いてしやべりまはつて居る兒もある。唯

見れば幻の浮き出したやうなもの、束の間に現はるゝ水の泡のやうなもの、強くさはればツと消えてしまふかもしれないぬ。この柔かいこのもろいものを、碎けぬ様に消えぬ様にと心をいためつゝ現實の人の形に造りかためて行くこれが幼稚園の教育かと自分は今まで心にきめて居た、然も此夢のやうな他愛ないものゝ中にすでにさびしい個性の差が閃いて居る、境遇の感化も等しく認められる、カライルなら泣きもしよう、そも〜之れ等に對しての保育はいかにほどこされてあるか。

「さうでございますかうして居ります中には随分様々な性質の小供がございます。それ等に對して私共の方で特別にどうといふ取り扱ひは致して居りませんが、場合々々によりまして多少の手加減は試みて居ります。泣くに致しましても小供によつて色々な場合がございますので、それに應じてなだめて泣きやませる時もあり強よく出て止める時もあり、すねて泣く兒には大泣きさせて自然に

止まらせたり、いくらなだめても意味もなくなたい長泣きする者は打ちすておくと云ふ風にいたして居ります。特別に注意せねばならぬ兒は、始終教師が見はりをして居りまして晝御飯の後など云ふ時間をえらんで靜かに話してきかせるやうに致して居りますが、これが多少の効果を認めて居る譯けでございます。家庭の感化も随分ございまして中には折角此方でしたことがその日家にかへつて打こはされてしまふと云ふ場合もたまにはございますが此の組の生徒は主に商家と學者の家の兒が多くございますので、先の場合よりも後の家の風などの差異が小兒の習慣性質に表はれて居る場合の注意の方が只今は必要に感じて居りますけれども、長く茲に居る内には多少習慣性質の差異が同化されてゐるやうでございます」と。これは保姆が私の問ひに答へられた言葉であるが、猶進んで小兒の知識及責任と云ふやうな問題についても次の如く語りつゞけられた。

「又知識發達の程度も小供によつてそれぞれ違つて居ります、此方から豆細工の材料を一樣に渡しまして或ものはそれを使つて様々な工風を疑らして新しい細工を造つて參るものもあれば、いつまでたつても同じものばかり造つて居るものもございませぬ」と保姆は生徒の新しい工風で造られた水上飛行機の豆細工を示して「又同じ旗をこしらへるにも始めの中は一本の旗を造りますが次にはこれが交又旗となるといふ風で、工風力の進歩は幼兒觀察上おもしろい現象でございます、然し學校では決して此の知識の發展に制限を加へたり又強制したりはいたしません、個性によつてその進歩を計つて居る譯でございます、まだ教へるといふよりは指導といふのですから、又小兒の責任の感念はよわいものでございますが多少のさざしは認められます、小供等が共同で使ふものを與へてやればその後片づけをしようなどとは一向思ひませんが、組木とか豆細工とか一人に一つ

渡したものはその小供が必ず後仕末はいたして参ります、自分で使つたものは自分で片付ける責任がある」と云ふ風な感念が起つて参つて居ります、然しまだ共同でやつたことには多少なりとも自分に責任があると云ふことに氣が付くほどまでには進んで居りませぬ、見れば共同に使つた鉛筆はさみ型紙などはあたりにほをり出したまゝ、人影は消えてしまつて居て、たゞ二三人のおとなしげな女の兒がこれを片付けて居るのを見た。

運動場へ出ると園内はもう小供でうづまつて居る、忽ち先生、といつて飛び付いて來る人なつっこい元氣ものも居る、未だお友達が出來ませんので先生の云はれる何となく臆病さうな陰氣なものも居る主として男兒は男兒、女兒は女兒とつれ立つて居る小さい砂場で男の兒等は土まみれになつてトンネルを造つたり池をほつたりして興して居る、築山の上を追かけまはる群、機械體操にくるまつたいたづらつこ、土俵の上でしこふんで居る。

おん大、プランコよし花壇よし若芽と萌える彼等の元氣、精氣を發生させその發育をおぎなひその智的發作の衝動を與へその美はしい情緒をばぐむべく設備は實に完全したものである、此處に彼等は小さい社會を型づくり、その活動の天地をかくしその興味を分かちその利害を争つて居る。

一般に小供は無邪氣で眞面目である、笑ふにも話すにも本氣である、いつはりが無いそして愉快で楽しい實に快樂は兒童に對し適切に生をいとなましめ世の善を知らしめ又善に導く唯一の衝動でがなあらう、又彼等は社交性にもえて居る、これだけの小供が見て居る所喧嘩もせねば泣きもせぬ、そは彼等の社交的精神がその教育によつて圓満に發達せるによるのであらう。

鐘がなつて小供等は又教室には入つた、はじめに例の如く靜かな樂の音が彼等の飛揚する魂をといめる、次いで先生が黄と青との色紙を出して一枚々々はぐつてその數を生徒に數へさせて後生徒

に一枚づゝくばらせて勝手なものを折つてごらん
なさいといふ、男兒は主にかぶとや蝶を折り女兒
は三寶をこしらへた。

晝食時となると先生はたすぎがけでバケツに水
をくんで机の上をふかれる、と當番の小供がお辨
當をくばつて歩るく、御飯の前にお手てを洗ひに
出たわんぱく連がいつまで立つてもかへつて來な
い先生はそれをわざ／＼よびに出かける、お世話
のやける事であらう先生のお顔もくもつて來る、
お目も光つて來る、無理もない、とは云へやつと
食卓についた小供の顔は今日見た一日中での最も
樂しさうに見えた時であつた、食事の様は残念な
がら自分等は見ずに控へ室にかへつた此室は平常
は参考室と思はれたがこゝに當幼稚園主事をし
て居られる安井先生が見えて自分等のために幼稚
園事業についてお話し下された。

當幼稚園は目下百二十名の幼兒を入園させそれ
を三組みに分つて各一人の高等女師卒業の保姆が

一組について居る兒童は三四歳頃の各入園志願者
の中から籤引で四十名だけとつて三年間、丁度小
學校年齢に達するまで保育する、今年は二年期を
とつて見たが効果があまりおもしろくなかつたと
の事である、先生は猶當園の保育法について御説
明があつた後傍にならべてあつたフレーベル恩物
及びそれより案出して目下當園にて使用して居る
新らしい恩物について更に御説明下された、この
新らしい恩物は張り紙、豆細工、組み紙、粘土細
工、畫等である、畫は生徒の自由意志で描いたも
ので試みにその一枚／＼をはぐつて見ると小兒の
單純な知識、心境、興味が自由に發表されてあ
る、描かれた畫は多く彼等の實世界に於ける經驗
である、飛行機が最も多く彼等の知識興味を動か
したと見えて最も多く畫かれてある、次には自然
の現象である、山や野や木や太陽月などが畫かれ
てある軍器は之れに次いで居る、これによつて自
分は小供と周圍の感化といふやうな題目をとらへ

て暫く考へた、食事がすむと園内外は又小供でみだされる、大人の精氣はすでに消しても無限かと驚かざるゝ小供の元氣は又活動を開始する同じ事を同じ手段で幾度繰り返へさうといつまでたとうとあくといふことを知らぬらしい。

一時が過ぎて暫くすると門内にはもうポツ／＼とお向ひの連中が來て居る、やがて遊び狂るうて居る群を通つて様々な遊具をもつた小供の列が通る、あと片付けをいたして居りますと先生は云はれた。

かうしてすべてが終ると生徒は又元の教室にかへつて朝の如く容儀を整へエブロンを取り替へお辨當をくばつた、「皆様さよなら御機嫌よろしう」とうたふと一同二列にならんでかへて行く廊下の出口に立つて先生も自分等も見送つて居ると小供等はお迎への乳母や小供やおばあさんに手を引かれてかへつて行く、中には車の上に納まりかへて行くものもある、かくて自分等は先きに小供等が

會集に來た室で倉橋氏の幼稚園教育に關する原理を約一時間に渡つて謹聽した。

かくして自分等の學問は終へた、實に幼の精ともなくしき宴けに招かれたやうな感がぼんやりした我心に紅やみどりに印象された。

第二一部

今日一日我等が目に見耳にきゝたる凡ては幼稚園教育即ち保育の全體とその對象とである、人間天賦固有の能力を發達せしむるとは、フレーベルの保育意義であつたが此處の保育はそれと共にいかに彼等の身體發育に資せんかにかに彼等の習慣を善良に導きいかに心情品性を美化させ且つ家庭教育の缺をおぎなはんかに腐心して居る、例へば黒板に竹を畫き教室に花を置き、毎時間前にオルガンを鳴らすなどは彼等の心情と品性を外部より美化させんためではないか、又、會集に集まり皆に摺袂させ容儀を整頓させかつ各後片付けをさせるなどは幼児に美はしき規律の習慣を造らせん爲

めではないか。彼等が智育體育は保育課目に表はれたる遊戯や様々の手技によつて目的を得て居る、そもく、活動は生育しつゝある幼児生活最初の現象であつてその産物であるそして又幼児の活動は彼等の行爲、感覺、思考の存在である、これを完全に表はすものは遊戯である、彼等はこの遊戯中に身體の發育をましその間に知覺動きその知覺は言語によりて明晰となり更に思考を生ずるのである、凡て此等の發達を導かんとするには遊戯の設備が必要である、當園に於ての設備は必ずしも規模大なりと申上ぐる譯にはいかないが目的を貫徹さすべくは、完全せるものと云ひ得やう、身體の發育を助ける爲にはブランコ、土俵場、機械體操などがある、知識の發達をうながすべく砂場、

花壇、池、築山更には鳩籠、鶏のこやがあつて、都會の小兒をして自然の一端にふれしめ、動植物の知識を得てフレーベルの所謂自然に對し同胞に對し神明に對する關係を認めしむるのみならず彼

等の同情趣味の範圍をひろげ得る便宜は至れりである、就中此等の中にあつて最も大なる習得は社交性の遺憾なき發達だらうと思ふ。

自己の喜悅満足をほしいまゝにすると同時に自他の靜安彼等が社會の調和をはからんとする思念は彼等の中に動いて居る、次に手技に於て自己が見親しく保母よりきゝたる如き彼等が知識の發達工風力の進歩は此處に敢へて贅せぬ、たゞ自分の觀察した限りで、幼稚園教育は一般に自發的である、受働的でない、畫をかくにも豆細工をするにしても、あゝなさいかうなさいと教へては居ない、先づ小供の直覺にうつたへ理會をうながし語らせ行はせ造らせると云ふやり方である、實にや幼児の春先のやうに萌芽する知識を一定の型に はめてのびさせやうとするのは猶その若木の芽をためて木を枯らすに等しいものである、自然のまゝに何等抑制なくのびさせて居るのは、保育の主義に叶つたことであらう。

次にかゝる幼児をあつかひかゝる重大なる保育にたづさはつて居る保母について一言して見よう、云ふ限りでもないがいかに設備が完全したとて保育の方針が當を得たとて保母その人を得ずんば百日の説法に過ぎぬ。

一寸考へてごらんさい、毎日學校に來て自分の組四十いく名の白痴とあまり境域をへだてない他愛ないものを取り扱かふのである、幾日へたとて幾日教へたとて進歩もせねば理想通りになつてもくれぬ、朝から晩まで彼等がパベルの言葉をたどらねばならぬ、子供可愛いと思ふ人にあらずして、この無意味の人型の中に有意味の人間歴史を洞察する人にあらずしてどうして二日と此役がつつかう。

ひるがへつて見れば彼等は世の母よりたくされた萬金にも代へ得ぬダイヤモンドの彫物である、彫りそこなへば永劫に玉を損ふ、もし失しなへばその罪萬死に當る、然して世に向つては神の下し

たる一つの光りを永劫に葬るのである、かゝる至寶なる小兒の前に保母はある時は母であらねばならぬ、ある時は教師でありかつ判断者であらねばならぬ、ある時は守りであらねばならぬ、責任をいとひ理智の發達をほこる女のよくなし得る役であらうか保母は教師の中の至難なるものである。

保母は完全なる經驗知識を有し温情忠實圓滑の諸性を具備する人でなければならぬ、又幼兒の心情を解しそれと同化する資性あり且つ母の精神と熱烈なる婦人の心性を有する婦人でなくてはならぬ、實に女子教育の最高完成は保母に要する訓練なりとは至當といふべきである。(中略)

次に幼稚園と家庭に關する考への一節を以て全文の終りとする。

幼稚園は今より六十年ほどまへに獨逸のフレールによつて建てられてるもので幼稚園の名の如きも彼れが人類の萌芽たる幼兒が恰かも草木が優しき園丁の手にはぐゝまるゝ如く自己上帝及び自

然に一致して教育せらるべしとの意より Kindergartenなる名を附したものであるさうな、彼れは宇宙萬物を通して永久不遍の理法をみとめ之をこの教育に應用しようとして恩物などを造つたのであるが爾來星うつりものかはりその哲學的教育法は廢せられたが Kindergarten の名におふ教育の方針は依然として隨喜されて居る幼稚園の存在は倉橋氏の原理に於て伺つた如く、1は公民教育をほどこす爲め2は家庭教育の缺をおぎなふ爲めである。

家にあつては彼等の社交的性情を發達させ満足さすことは充分に出来ない、又その身體發育に資するほどの場所もない又適當な教育もほどこせない、こゝに於て愛兒を家庭は幼稚園にたくするのである、家庭と幼稚園の關係は直接なものである、家庭の印象は保育の上に關係を及ぼすことがはなはだしい折角幼稚園で教へても家庭に於てそれがこはれてしまふことは敢てめづらしくもない事實

である、それでは幼稚園にやる必要はないはずである、とにかく一般に家庭は自家の缺點を知つて幼稚園に出すがそれ以上の注意はほらはない、幼稚園に保育の實際を見にくる母親もない、これでは幼稚園事業の振はないのもことほりではないか。

折角世の母が幼稚園の優秀なる點を知つて愛兒をそこにたくするならなるべく幼稚園教育にも注意をはらつてもらひたい、そして彼等の家庭教育の方針をもそれにしたがふやうにして頂きたい、かくして始めて彼等が愛する兒等を幼稚園に託する意義が判然しひいては幼稚園存在の意義もこゝに貫徹するわけではないか、かくて幼稚園事業は盛んになり人間教育の根本がかたくなり然して社會は完全な教育を受けたる人によつて改善されて行くわけではないか、世の母たる人よ。以上。